

半導体漫遊記

(295)

湯之上隆

半導体には、3~5年ごとに好況と不況を繰り返す「シリコンサイクル」がある。しかし、好況の真ただ中にいるときは、それが永遠に続くと思いがちでしよう。たとえば、2016年から始まった半導体市場の急成長は「スーパーサイクル」と言われ、シリコンサイクルが消滅したという見解もあった。

ところが、そのスーパーサイクルは18年にピークアウトし、19年にはメモリ不況に突入していった。これを後から振り返ってみると、16~18年は「メモリバブル」だったという結論になる。

半導体市場が好況になるのか、はたまた不況に陥るのかということを事前に察知する方法は無いのかという

と、世界半導体の四半期(3カ月)売上高の対前年同期比の成長率を分析するという手法が知られている。

1999年1月以降、成長率が急増し2000年8月に1.52

となった。これは、前年同期比で52%成長したことを意味する。そして、これを「ITバブル」と呼ぶようになった。

その結果、PCやスマートフォンなどの需要が急拡大しアマゾン、マイクロソフト、グーグルなどのクラウドメーカーによるデータセン

タ投資が活発になった。さらに、コロナに

見ても、このように半導体市場が好況になるか不況になるかは、この成長率の上昇しているのか、下降に転じている

モトワーク、オンライン学習、ネットショッピングが急速に普及していった。

000年8月に1.52低下した。

このように半導体市場が好況になるか不況になるかは、この成長率の上昇しているのか、下降に転じている

急拡大しアマゾン、マイクロソフト、グーグルなどのクラウドメーカーによるデータセン

タ投資が活発になった。さらに、コロナに

見ても、このように半導体市場が好況になるか不況になるかは、この成長率の上昇しているのか、下降に転じている

た半導体不足は24年まで解消しないという見方が大勢を占めた。実は筆者もそう思っているところだが、22年に入

コロナ特需の終焉か

半導体不況、早くても今年後半

期(3カ月)売上高の対前年同期比の成長率を分析するという手法が知られている。

しかしその後、成長率は急降し01年9月に0.55(つまりマイナス45%)となった。これがITバブルの崩壊である。

その次に大きな不況として08年9月に起きた、米投資銀行のリーマン・ブラザーズの

の成長率が見ればいいということになる。

よる集ごもり需要によって、各種電機製品やゲーム機が爆発的に売れるようになり、21年には半導体不足が顕著

この半導体不足を解消するために、半導体業界は増産に次ぐ増産を重ねたが、深刻化し

た半導体不足は24年まで解消しないという見方が大勢を占めた。実は筆者もそう思っているところだが、22年に入

実際に1999年1月から2002年5月まで、このグラフを書いてみると3~5年ごとに成長率が上がった

り下がったりする様子

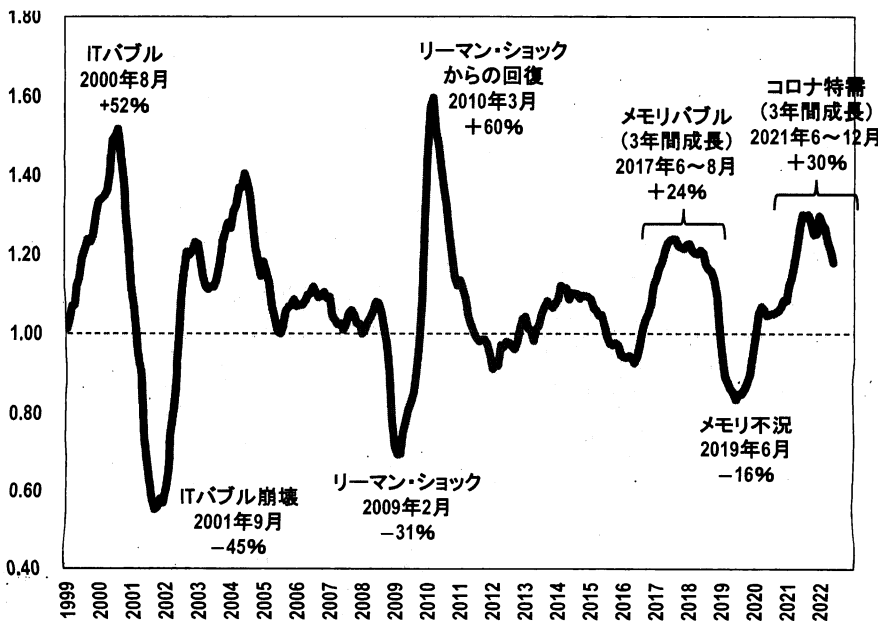
の成長率が見ればいいということになる。

よる集ごもり需要によって、各種電機製品やゲーム機が爆発的に売れるようになり、21年には半導体不足が顕著

この半導体不足を解消するために、半導体業界は増産に次ぐ増産を重ねたが、深刻化し

た半導体不足は24年まで解消しないという見方が大勢を占めた。実は筆者もそう思っているところだが、22年に入

た半導体不足は24年まで解消しないという見方が大勢を占めた。実は筆者もそう思っているところだが、22年に入



四半期の半導体売上高の対前年成長率の推移(～2022年5月)

従って2022年の3年間、半導体「コロナ特需」だったということになりそうである。やはり半導体産業は、シリコンサイクルから逃れることはできないようである。(微細加工研究所・所長)